

教科書がつなぐ子どもの学び



小林貴史
東京造形大学 教授

活動のプロセスから伝えたいこと

教科書が担う役割は時代とともに変わってきました。それは、学校教育に何を求めるのか、またそこで子どもの学びをどのようにとらえるのかということの反映でもあります。かつて多くの知識や技術をいかに効率よく身に付けるかということが目的とされていた時代には、学習の結果としての作品が一つの手本として示されていることが、子どもの学びや先生の指導を支える上で大切なことでした。今日、各教科において資質や能力を培うことがその目標と内容に求められる中で、教科書にも結果としてだけではなく活動の過程において何を大切にすべきなのかを伝えていくことがその役割として重要になってきました。開隆堂の教科書では、魅力ある作品や活動に至までのプロセスを単なる作り方として示しているのではなく、活動を通して獲得していく資質・能力のポイントを子どものつぶやきやマークからより理解しやすい紙面を構成しています。まさに紙面全体から育みたい子どもの姿が立ち上がってくることを感じる取ることができるのです。

プラットフォームとして機能する教科書

活動を通して資質・能力を培うためには、教科の特性として材料や用具とのかかわりをはじめ、人や環境、社会との関係性が大きなネットワークとして子どもの活動を支えていくことも大切です。本教科書は、このネットワークにおいてさまざまなものやことをつないでいくプラットフォームとして機能していくことをめざしています。このことは、各題材の活動が何によって成り立っているかを体系的に理解できるとともに、ネットワークをもとに新たな活動へと展開していくことも可能にしているのです。そしてそこにはヨコの広がりだけではなく、タテのつながりとして子どもの成長に沿った幼・小・中との活動の連携にも配慮しています。教科書は、一つ一つの題材がどれだけ魅力あるものであっても、その寄せ集めだけでは豊かな子どもの学びを保障していくために十分とは言えません。題材をもとにしたつながりを通して、子どもたちや先生方の「どうしたらいいの？」にこたえるとともに自らが「こんなこともやってみたい」という発想のきっかけともなるような教科書であることが大切だと考えているのです。

